

岡部嶺男

《青織部縄文鼎》



岡部嶺男 (1919-1990)  
《青織部縄文鼎》

1955年  
陶土・緑釉  
高さ49.2, 幅35.2, 奥行36.5cm  
平成25年度購入

三

足に成形された器の表面に縄の文様がびっしりと施され、その上から緑色の釉薬が全体に掛けられています。この解説を単語に置き換えると、三足＝「鼎」、縄の文様＝「縄文」、緑色の釉薬が全体に＝「青織部」となり、単語の順番を前後させると「青織部縄文鼎」となり、この作品の名称となります。

陶芸作品の場合、技術・技法＋文様・装飾＋器形を組み合わせて名称が付けられていることが多く、作品を読み解く鍵が隠されています。実はこの作品には、他にふたつの名称があります。ひとつは、作者である岡部嶺男がこの作品を発表した一九五五年の第十一回日展で用いた《青織部縄文花器》、もうひとつは、この作品を収める木箱の蓋に岡部自身が書いた《青織部鼎》です。当館での名称はこれらをミックスして、岡部が生み出した作品をよりわかりやすく伝えようとしています。

岡部嶺男は、陶磁器の産地として知られる愛知県瀬戸で、窯道具の製造を営む家に生まれました。高校時代にはすでに成形技術も窯焚きの知識も教師を凌ぐほどであったといいますが、本格的な作陶活動は、復員した二年後の一九四九年頃から、その翌年には日展に初出品し初入選を果たしています。

岡部の陶技は、生まれ育った瀬戸の伝統技法をベースにしています。「織部」は

そのひとつで、木灰に酸化銅を加え、緑色に発色する釉薬を掛けた陶器をいいます。名の由来は、緑釉が多く使われた斬新な陶器が、茶の湯の宗匠であった古田織部の好みを反映したものであったことといわれています。そして「青織部」は、器全体に緑釉を掛けたものを指し、「総織部」とも呼ばれていますが、ここには緑を青と呼称する日本人の習慣が見取れます。

ところで、岡部は戦時中に、死と直面し、生きることの尊さを実感する経験をしました。後年になって、「二カ月の食糧なきジャングルの生活はイヤだなしに私を縄文時代へとつれもどしました」と回想し、「縄文」との結びつきを示しました。また、「『存在の危機感』あるいは『生命の直接の表現』といった現代芸術の共通した精神は、原始に通ずる」と、縄文土器が現代美術に通じるものと考えていました。岡部の縄文は、撚紐を回転させてその痕跡を文様とした縄文土器とは異なり、取っ手を削り出した羽子板のような叩き棒に荒縄を巻き付けた道具で、叩きながら成形と刻印を同時に行ったものです。そこには、中国古代の青銅器を思わせる「鼎」形に、土との格闘から生まれた触覚的な美感や、生々しい活動の痕跡を刻み込むことで、当時の因襲的な陶芸界の状況を打破しようした一端が垣間見られるのです。

(工芸課長 唐澤昌宏)